

新 真健康論

當瀬規嗣
(札幌医科大学教授)



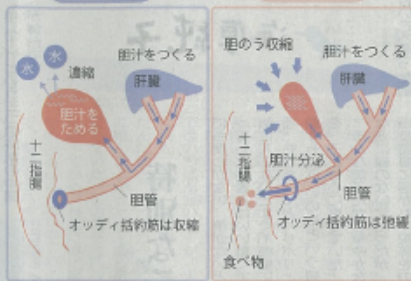
胆のうという臓器をご存じでしょうか。胆石や胆のうがんは存在しますが、胆のうの働きについては存在しない方が多いかも知れません。腸や膵臓と違って胆のうを持っていません。胃腸によっても手拍子取ってしまいますから、人にとって必要不可欠な臓器ではないことが分かります。では、余計なものなのかというところ、そんなところはない。胆のうは右のわき腹、肋骨の下すぐあたりの奥の方に位置しています。じょうぶな肝臓

←胆汁の流れ

胆のうのはたらき

普段の状態

食べ物がある時



オットディ括約筋

胆汁を流す胆嚢と胆臓からの消化液である胆汁を流す主幹管は十二指腸の壁に合流して壁に埋め込まれる。これを十二指腸環状筋といひ、その中に存在する筋肉をオットディ括約筋といひ、普段は収縮して胆汁と胆汁の流出を止めているが、食物が十二指腸に入ってきて、それが刺激となり筋肉が緩んで胆汁と胆汁が食べ物に向かって流れていく。発熱者にちなんなを病である。

脂肪の消化液ためる胆のう

の裏下です。さきほどの図に十二指腸があります。肝臓から十二指腸に向かって、胆管という管が通っているのですが、その胆管のすぐ下がるようにして胆のうがあります。胆のうは袋状の臓器で、中に胆汁をためています。胆汁は脂肪の消化吸収に必要な消化液です。胆汁がないと、食物中の脂肪が消化できなくなり、腸の中にためられた脂肪の刺激によって下痢が起ってしまうのです。下痢のためには胆の栄養素を消化吸収する機会も失われ、栄養失調や水分不足に陥るのです。ですから、胆汁はともにも大事な消化液であり、胆のうはそれをためておくのです。

でも、胆汁は胆のうで作られるものではありません。胆汁は肝臓で作られています。作られた胆汁は肝臓から胆管に流れ出て、十二指腸に分泌されるのですが、その出口のところにはオットディ括約筋という筋肉があります。通常は閉められて胆汁を作っていますので、そのままなら胆汁は凝固してしまいます。そこで、胆管とつながっている胆のうに胆汁がためられるのです。

胆のうはただためるのではなく、胆汁の水分を吸収して濃縮しています。これによって肝臓が作る胆汁を大量に受け入れることができますし、また胆汁の消化液的作用を強化することができるようで、肝臓が作る胆汁は薄い黄色を帯びたサラサラとした液体なのですが、胆のうのために

られている胆汁は濃い緑色のどろどろとした液体になっています。食べ物や十二指腸に達するまで、オットディ括約筋が緩むと同時に胆のうが収縮して、胆汁が食べ物に降りかかって、脂肪の消化吸収がスタートします。

吉米 熊の胆のうは、胆嚢と呼ばれて、胆汁管として使われています。熊の胆のうを乾燥させたものですが、当然、中の胆汁も一緒に乾燥されて含まれています。消化不良や腹痛、食あたりなどに効果があるとされていますので、胆のうで濃縮された胆汁には腸内の動きを整える作用があるようです。

胆のうの働きを食へることも、胆のうが破壊され、胆石や胆のう炎の原因になることわれます。病気で胆のうを取ると胆汁が薄まります。脂肪の消化吸収力が落ちます。なので、腸ごい食べものを食べると、下痢が起ります。胆のうは大事な臓器なのです。

次瀬は山口理・静岡県立静岡がんセンター総長の「がんドクトルの人間学」です。

とうせ・のりつぐ 1984年北海道医科大学卒、89年北海道大学院修了、医学博士。北海道大医学部理学助手、札幌医科大学理学部助教授、米・シンシナティ大助教授を経て、98年から現職。2006～10年、医学部長。専門は生理学・薬理学。